

## F-4 諸民族とその社会

### 603. 民族の性向

ジャワ人、スンダ人、ミナンカバウ人、ブギス人というインドネシアの主要民族の総称はマレー系民族(→563)である。難しく言えばオーストロネシア語族のことである。ほとんどの民族はジャワ人、スンダ人のように特定の地域に固まっているが、沿岸マレー人のようにマレー半島以外にスマトラ島やカリマンタン島の沿岸に分散している民族もある。

ニューギニア(イリアン)島の内陸部の原住民はパプア系(パプア系とは別にメラネシア系の並立を主張する学説もある)といわれマレー系より皮膚の色は黒く、容貌も異なる別系統の人種である。言語体系も別系統に属している。

インドネシアではインドネシア人しかないことになっている。従ってジャワ人とカバタック人とカという民族別の公的な統計はない。ただしインドネシア語以外に“地方語”が認められているので使用言語者数の統計から民族の総数を推定している。

狭い日本でほぼ単一民族からなるはずの日本人にも県民性といわれる多様性が指摘される。日本と比べると民族も異なるインドネシアは正に多様性そのものである。インドネシアにおいては多様性の存在を国是(→367)にしている。

インドネシアの各民族に“独断と偏見”により最も適当と考える形容詞を選定すると、西から[熱烈なアチェ人]、[雄弁なバタック人]、[利口なミナンカバウ人]、[呑気なマレー人]、[陽気なスンダ人]、[繊細なジャワ人]、[粗忽なマドゥラ人]、[真摯なバリ人]、[がさつなダヤク人]、[勤勉なマナド人]、[頑固なトラジャ人]、[勇猛なブギス人]、[奇妙なアンボン人]と当てはめてみた。当然いろいろ異見のある所であり、一語で民族性は語り得ない。

民族の性格を表す小話は色々ある。その一つは人が何かトラブルに巻き込まれた場合の対処について民族の性格が誇張されたジョークである。『ジャワ人は仲間を集めて自分の言い分の証人にする。バタック人は理屈を並べて論破する。バリ人は禍退散のお祈りをする。ブギス人は相手を刺し殺してしまう』という。

インドネシア民族の内、ジャワ人(F-5)とバリ人(F-6)は別章を設けて詳述しているので、本章ではその他の主要民族を記載している。少数民族(F-7)と華人といわれる中国系住民(F-8)は特殊な存在であるので別章としている。

民族とは宗教、言語、文化、慣習に基づく価値観を異にする集団である。インドネシアの民族間の相違を強調して多様性を主張することもできる。また、一方では民族間の底流にあるアニミズム(→696)、アダット(→588)等の価値観の共通性、言語の類似性を強調して同質性を主張することもできる。インドネシア人は多様であり、かつ同質でもある。

⇒735.内在する民族問題、736.民族紛争の火種

## 604. 怒りのアチェ人



スマトラ島の最北端のアチェはインドネシアの最西端になる。古くからインド、アラビアから商人が渡来した。「アチェ (Aceh) 人」はやや色黒で容貌もコーカソイド的である。他のインドネシア人と比べると何か違和感があるのは長年にわたる外来人、特にインド人との混血の結果であろうか。ちなみにアチェ語の語彙にはオーストロアジア系の言葉が多いらしい。

マラッカ海峡に臨む東西交易の要所の地であるアチェは早くから開け、ポルトガル、オランダのヨーロッパ諸国が進出してきた頃、既にアチェ王国(→257)が存在し、マレー半島側のマラッカ王国と海峡の通商貿易の覇権を競っていた。現在も海峡に面した東海岸は豊かな農村で人口密度も高くアチェの表海道である。

アチェ王国はオランダ植民地に併呑されるが、その際アチェ人はオランダを相手に武力抵抗を行い独力で30年間(1873-1912)も戦った。いわゆるアチェ戦争(→281)である。アチェ人の死をもともしない抵抗によってアチェ人は精悍かつ勇猛な民族としてオランダ人のみならず、その傭兵として参加したアンボン人などの肝に銘ずるところとなった。

一方、宗教においてアチェは東南アジア・イスラム教のいわば本山であり、布教の基地であった。また、アチェはインドネシアでは最もメッカに近く、かつてメッカ巡礼の船の出る港であった。インドネシア人の中でハジ(メッカ巡礼者)の割合は最も多い。アチェは東南アジアのイスラム教徒から“メッカのベランダ”といわれた。

インドネシアのイスラム教徒の中でアチェ人は最も敬虔なイスラム教徒であり、かなり柔軟なイスラム教徒であるジャワ人とは対照的である。アチェ人のイスラム教徒としての選良意識がアチェ独立運動(→435)の原動力として潜在しているのであろう。

「たしかに私は強盗もやったし泥棒もやった。喧嘩もし、暴力もふるってきた。でも嘘をついたり、人をだましたりするのは私の性に合わない。私は痩せても枯れてもアチェ人だ」誇りたかきアチェ人の科白<sup>1</sup>である。

スマトラ島のミナンカバウ人の社会構造は母系社会で世界的に著名であるが、アチェ社会においても女系が支配的である。アチェ人は結婚すれば女方に居住し、女方の親から財産を分けてもらい自立する。イスラム教の婚姻法に反するが、女性優先のアダット(→588)だけは守られてきた。

アチェ王国の最盛期に君臨したイスカンダル・ムダ国王の後は3代にわたり女王が君臨した。アチェ戦争後期の指揮者チュッ・ニャ・ディン(→341)という女性である。

女性の純潔は守られる。娘が強姦される事件があればその父親や兄弟は犯人を殺害して復讐せねばならない。日本の占領中の日本兵の戦死者には女性問題でアチェ人に復讐されて殺害された者がかなりいるらしい。伝統的なアチェの高床式住宅は黒の板に幾何学模様の色鮮やかな色彩が施されており威風を放つ。アチェ人の結婚式は金銀細工の満艦飾できらびやかである。⇒083.アチェ/西の正門

<sup>1</sup> プラムディヤ。アナンタ・トゥル著「足跡」

## 605. 沿岸マレー人



「ムラユ (Melayu)」は英語では「マレー (Malay)」と表記される。マラッカ海峡の対岸のマレー半島にはマレー人のマレーシアという国がある。マレー人はスマトラ島側にもいる。しかし中身がはっきりしないのがマレー人の特徴である。

マレー半島を中心にスマトラ島、カリマンタン島の沿岸部のムラユ語(次項)を話す人々はムラユまたは沿岸マレー人といわれる。これに対して単にマレー人の方は漠然とした広い意味である。広義のマレー人とはマレー系民族(=オーストロネシア語族)の総称であり、インドネシア人のほとんどはマレー人である。マレー人の定義に「マレー人でないと思っている人を除いた人がマレー人である」というものであった。

沿岸マレー人=ムラユはスマトラ島やカリマンタン島の低湿地のマングローブの一角をきり拓いて住んでいる、単独家族もある。2~3年程そこで生活すると新天地を求めてまたどこかへ移動する。土の養分が尽きてきたという要因もあるが、フロンティアでの新たな生活に賭けるのが彼らの生き方のようである。

このような生活形態はブギス人(→615)やバンジャル人(→192)にもある。ムラユと異なるところはブギス人やバンジャル人はいい所であれば定着し仲間が集まり、コロニーとなって自然に村ができあがる。これに対してムラユは人が来ると逃げ出すようなところがある。ムラユの語源の説の一つにジャワ語の「逃げる」というのがある。

ムラユの性格を表すものとして次のような小話がある。ジャワ人に会って「何をしているのか？」と尋ねると「仲間に相談に行くところ」という返事であった。ミナン人は「商売に行くところ」と応えた。さてムラユの答えは「何をするのか考えているところ」であった。ムラユのこだわりの無さを示している。別の小話は「一人のムラユは昼寝をする。二人のムラユは昼寝をする。三人のムラユも昼寝をする」という。ムラユへの風刺のパターンである。

ジャワ人も何かの拍子に低湿地にのがれるとムラユになる。この場合のムラユには“都落ち”というニュアンスになる。しかしムラユにはもとを辿ればスリウィジャヤ王国(→255)という正統王朝に連なるといふ誇りを秘めている。

今のムラユを見ていると彼等がスリウィジャヤ王国やマラッカ王国を作った子孫とは信じられない。ある民族が栄光有る歴史的役割を果し、今は逼塞(ひっそく)している例はギリシア人、蒙古人にもいえる。

元の定義に戻るとムラユとは人種とか民族に限定されたものでなく、総合文化的なものともいえる。熱帯アジアのマングローブの拡がりの中ではムラユ社会が生態系に合っている。インドネシア社会を構成する一つのパターンである。

《移動型のマレー社会》は《定着型のジャワ社会》と対称的である。しかしムラユ社会も集落化、定住化の様相がましてきており変質しつつある。ムラユ社会のジャワ化というところであろうか。⇒034. マラッカ内海

## 606. ムラユ語

8世紀頃からスリウィジャヤ王国(→255)がスマトラ島パレンバン付近(→102)に繁栄した。ジャンビ(→100)地

方に存在したムラユ王国(→258)は12世紀頃に勃興した後、次第に衰退したとみられる。15世紀にマレー半島に港市国家マラッカ王国(→032)が栄華をきわめた。

これら海峡を支配する何れの通商王国もマレー人が築いたものである。マラッカ海峡支配の中心がスマトラ島側のパレンバンからジャンビを経てマレー半島側のマラッカへと転移して行ったものである。

今日もマラッカ海峡のスマトラ島とマレー半島の両岸はマレー人の居住地である。マレー人は今でこそインドネシアとマレーシアの二つの国に分れて国境を隔てた別の国家の下の国民であるが、もともとは同一の民族<sup>2</sup>である。

スリウィジャヤ王国、マラッカ王国の権勢によってマレー人は商業の人としてマラッカ海峡を支配し、交易の中心で話される「ムラユ(マレー)語」は地域全般の商業語になった。東南アジア海域へのマレー人の拡がりからムラユ語は島嶼地域の“共通語(リンガフランカ)”となった。

ムラユ語は商業用語であったが、マラッカ王国を引き継ぐビントラン島のリアウ王国(→095)のラジャ・アリ・ハジ王によってムラユ語の編纂が行われた。リアウのムラユ語が後のインドネシア語(→957)の母体になった。[スリウィジャヤ王国⇒マラッカ王国]の最大の遺産はムラユ語でなかろうか。

マレー人の習性は沿岸に住むことで、内陸部に入るよりはスマトラ島、マレー半島、カリマンタン島の沿岸伝いに拡散し小王国を築いていた。パレンバン周辺の南スマトラ州の原住民はパレンバン人ともいわれるが、広い意味のマレー人である。

スマトラ島、マレー半島に割拠(かっきょ)した王国の歴史を詳細に見るとブギス人(→617)の血が入っている。あるいはブギス人に総入れ替えの王室もある。ブギス人はムラユ語を話すのみならず、ムラユ語の洗練に努めた王もあり、ムラユに完全に同化している。マレー人自身も篡奪者の子孫を自らの王として敬愛した。ムラユとは異物をも併呑する柔軟な民族概念のようである。

現在のマラッカ海峡を支配するセンターはシンガポールである。マラッカ海峡はムラユ(マレー人)の手から奪われ、シンガポール華人の手にある。シンガポールに居住する今のマレー人はあえて言えばアウトサイダーとして疎外されている。

ハビビ大統領(→454)が就任直後、インドネシアで華人が差別されているという外国人ジャーナリストの批判的質問に対し饒舌(じょうぜつ)の弾みで「シンガポールにはマレー人の将軍はいないではないか」と即座に反論して物議をもたらした。よく調べれば居たというだけでインドネシア人がそのように思っても無理はない。ところでインドネシアでさえマレー人の大臣や高級軍人は何人いるのだろうか。

## 607. いかついバタック人

「バタック人(Batak)人」はスマトラ島北部のトバ湖周辺の山岳地帯に居住するはプロト・マレー系(→565)民族で高床式家屋建築、衣装、葬儀に民族色が豊かな伝統文化をもっている。スマトラ山中に陣取り外来文化

---

<sup>2</sup> マレー半島はアジア大陸の一部であるという厳然たる事実から民族の移動はマレー半島経由で島嶼に拡がったと錯覚しやすい。しかし、現実のマレー半島は険しい山岳の地であり、マレー系の民族移動の際のルートにはなりにくい。アジア大陸から、南シナ海経由で直接スマトラ島に渡った民族が時代の経過とともにスマトラ島から半島へ逆流して定着したのがマレー人であろう。すなわちマレー人の故郷はマレー半島ではなくスマトラ島である。インドネシアのマレー人の人口はマレーシアのマレー人の人口に匹敵する。

の進入を頑なに排除して伝統を墨守した。



食人(次項)の習慣は外来者を恐れさせ寄せつけないように作用した。その後、バタック社会は大きな変動を経たが、今なお個性の強い伝統文化を保持していることも事実である。

バタック人と総称しているが、次の 6 種族<sup>3</sup>に細分される。北からカロ(karo)、パツパツ(Pakpak)、シマルングン(Simalungun)、トバ(Toba)、マンダイリン(Mandailing)、アンゴラ(Angola)である。

バタックという呼称は海岸地帯のイスラム教徒が「豚を食べる」と軽蔑の意味を込めた呼称である。従ってイスラム教に改宗するとバタックでなくなるはずである。しかし今日ではバタック人自身がこの言葉にアイデンティティを求めているので差別のニュアンスは消えている。

南のマンダイリン族とアンゴラ族はミナンカバウ人の影響を受けてイスラム教徒である。その他の種族はキリスト教徒であるが、低地ではイスラム教への改宗も見られる。

彼らの共通の先祖シ・ラジャ・バタック(Si Raja Batak)はトバ湖の中央のプスク・ブヒット(Pusuk Buhit)山頂に降臨したという伝説を伝えている。

政治的結合は村が基本単位である。各種族は防御のため集落の周りに堀や垣を巡らす。集落の中心はブリンギンの樹(→050)である。そして村の間ではしばしば戦争を行われたが、戦争といってもゲーム感覚である。水田の破壊行為は行なわない、などの戦争のルールが守られた。負けた方の捕虜は食べられるか奴隷になる、というのが最悪の事態であった。

トバでは貴族、平民、奴隷の社会階層からなり、政治結合が拡大していた。王(ラジャ)の証として代々伝えられた服と腕輪があった。

1872 年、オランダの攻略に対してバタック人はシンガマンガラジャ(Singamangaraja) 12 世王(1849-1907 年)をたててバタック戦争で抵抗した。全バタック人を結合したわけではなく、1907 年、オランダに敗れて戦死した。同王の肖像は【1000ルピア札】で馴染みの顔であった。

双系社会(→568)が主であるインドネシアにおいてバタック人は例外的に父系社会であり、血統は父の系統をたどる。シマルングンは 4 氏族、カロは 5 氏族、その他の種族では 50 以上になる。同氏族の間の結婚はタブーである。

バタック人は古くから出稼ぎをしていたが、折から起こる近代社会の労働需要に応じて山を下りメダン(→089)などの海岸地域に移住した。さらに国民経済の拡大によってジャカルタに積極的に出かけるようになった。このため 600 万人といわれるバタック人で北スマトラの故郷の地に残る者は半分の 300 万人といわれる。

⇒087.カルデラのトバ湖

## 608. 食人慣習

バタック人は“食人”の慣習があったことで知られる。人を食べるのは栄養補給の目的のためではなく一つ

<sup>3</sup> バタック人では伝統文化の個性の強いトバ族やカロ族が目立つが、人口的にはマンディリン族やアンゴラ族が多い。マンディリン族やアンゴラ族はバタック人と呼ばれることを嫌がるという話を聞いたことがある。

の儀式である。食べることによって相手の持つパワーを自分のものとする。従って食べるとあるいはおいしいかもしれない女や子供を食べることはしない。食べられる者は犯罪者、戦争の捕虜である。バタック部族間の戦争が止むことのなかったのは食べるべき捕虜の確保のためであったといわれる。

食人慣習のため周辺の民族には野蛮人として恐れられ警戒された。外部からの侵入を防ぐために故意に悪名を広めたふしもある。しかしラッフルズ(→338)はバタック人の地へ乗り込み、独自のバタック文字をも有する勝れた文化の民族であることを世に伝えた。

地球上の各々の民族は文化を持っている。一夫多妻、同姓結婚、奴隷、未亡人の同時火葬、人身御供など他の民族から見れば宗教で禁じられていること、倫理に反することでもその民族にはタブーでもなんでもなくてむしろ文化ということもある。食人<sup>4</sup>も文化の遅れではなく文化の一つの奇習である。日本でも薩摩では処刑された罪人の肝を食べたらしいことを司馬遼太郎が記している。

食人は蛮行として厳しく禁じたキリスト教の普及もあり、今世紀には食人慣習はなくなった。今ではサモン島(→087)には食人処刑のための“まな板”のような石の台が観光名所になっている。19世紀になってプロテスタント宣教師の布教努力でバタック社会は急速に近代化した。バタックの2/3はキリスト教に改宗した。

バタック人の性格は開けっ広げである。ジャカルタのオフィスで「犬は美味しい」と大っぴらにいう。「お爺さんの代までは人を食べていた」とこれも自慢げにいう。そのデリカシーの無さを気にする風もない。

開放的な性格の民族であるバタック人はジャワ人とは対称的である。ジャワ人は自らはハルス(→634)であり、バタック人をカサル(→634)の代表と思っている。この両者が同じ所に居住すると摩擦が生じる。ジャワ人はジャカルタの強盗はバタック人だと思っているし、一方、バタック人はジャカルタの乞食はジャワ人と思っている。とにかくバタック人とジャワ人は相性が悪い。

ジャカルタで声の大きい人がおれば、まずバタック人である。先入観をもって見れば顔もえらが張りいつい印象を受ける。バスの運転手と車掌はバタック人が多い。だから運転が乱暴であり、車掌はわめき散らしている。これはジャワ人の意見である。

しかしながらインドネシア人の中では論理的思考において素質が優れているバタック人は近代社会への適応が早く、弁護士・政治家・高級軍人に名をなした人が多い。また音楽の才能に優れている。

バタック人に関する小噺の一つ。「一人のバタック人はギターを弾きながら歌う。二人のバタック人は博打(ばくち)をする。ちなみにバタック人はチェスの名手である。三人以上のバタック人は喧嘩をする」

## 609. ミナンカバウ人

「ミナン人」と略称されることもある「ミナンカバウ(Minangkabau)人」の故地は西スマトラの山岳部の盆地である。水田耕作による農耕民族である。19世紀初めにラッフルズ(→338)がこの地を訪れた際に整然とした水田と過密な人口に驚いている。

山中の盆地からスマトラ島の東岸と西岸にいくつかの河川が通じている。河を使用する複数交易ルートの存在はムランタウ(次々項)という出稼ぎがミナン社会の慣習となり、ミナン人の商才を磨いた。

近代社会の展開とともにミナン人はインドネシアの各地に進出<sup>5</sup>するようになった。インドネシア各地に普及

<sup>4</sup> インドネシアではバタック人以外にも食人の慣習はあった。オランダ人が来た当初にスダ人の食人を記している。

<sup>5</sup> ジャカルタのミナン人は軍隊など拘束される勤務を避けて個人営業が多いのは家事に機敏に対処するためらしい。田口重

しているパダン料理(→764)のレストランもミナン人の経営である。ミナン人の半分は故郷の西スマトラを離れているといわれる。

しかしミナン人は故郷への愛着が強い。過疎の村に不釣り合いの立派なモスクなどがあるのは他郷のミナン人から故郷への送金によるものである。



ミナンカバウ人社会は世界でも珍しい母系社会(次項)であることで知られている。父系、母系、双系というのは社会における家族関係の仕組みで、社会の発展度合や民族の素質とは関係ない。むしろミナン人の場合はムランタウという出稼ぎの慣習が進取の気質をもたらし、社会を活性化した。『スマトラの村の思い出<sup>6</sup>』には20世紀初頭の牧歌的なミナンの村落の様子が描かれている。

歴史伝説タンボ(tambo)によればミナン人の祖先はアレキサンダー大王(→944)であり、マレー人やその他スマトラ諸民族の宗家に位置づけられることから誇り高い民族である。

ミナン人の移住は盛んでアチェ州タパック・トゥアン地方やリアウ州クアンタン地方はミナン人が圧倒的である。マレー半島のヌグリ・スンビラン州は移住したミナン人によって開拓された地域である。

オランダ植民地支配のスマトラ島への侵略に対しミナン人はパドゥリ戦争(→278)を戦いオランダを苦しめたが、時は下ってインドネシア独立の民族主義運動においても主導的役割を果たし、インドネシア独立時に人材を輩出した。

独立運動を指導したハッタ(→443)、シャフリル(→444)、タン・マラカ(→295)、ナシール(→417)などの民族主義者はミナン人である。ミナン人の進出先は政治、経済、文化などあらゆる分野に知識階級の人材を輩出しており、特に文学、ジャーナリストの分野では突出している。ブキティンギの近くのコタ・ガダン村は多数の知識人を輩出していることで知られる。

もしミナン人がいなければ現在の形のインドネシアはなかったかもしれない。インドネシアの総人口の3%の割に存在感の大きい民族である。

最近のミナン人は国営パダンセメント(→530)の外国資本への売却問題にゴテるとか、コトパンジャンダム問題(→743)などで政府を手こずらせている。ミナン人は優秀な人材が他郷に出て故郷はもぬけの殻になったのだろうか。

⇒097.西スマトラ州

## 610. 母系社会

ミナンカバウ人は「母系社会」という世界でも特異な社会形態で知られている。母系社会の基本は氏族の系譜を母である女性を通して辿ることである。母系社会では氏族の共有財産は女が引き継ぐ。田畑、家屋の財産は母から娘に相続さる。牛の形をした民族色豊かなルマ・ガダン(→938)という伝統家屋も母から娘へ代々引き継がれる。

久氏 HP

<sup>6</sup> ムハマッド・ラジャブ著、加藤剛訳「スマトラの村の思い出」



ルマ・ガダン Rao-rao 村

は娘の部屋はあるが、成人男子の居場所はない。成人になった男は昼は生家の田畑で働き、夜はアダット・ハウスという集会場かモスクにたむろする。結婚した男は、夜、寝るためにだけ妻の家に通う。

家を取り仕切る必要な男手は夫ではなくて妻の兄弟である。男は自分の子供ではなく、姉妹の子供の扶養義務がある。子供にとって母の兄弟である伯父ママック(mamak)は父よりと親しい関係になる。これが母系社会の仕組みである。

母系社会とは男が虐待された社会のように見える。しかし母系社会は女権社会ではない。長老、大家族長、スク(氏族)の長の政治権力は男性にある。政治権力を有する男性は家長である女性の兄弟である。いわば政治は男、経済は女の分業体制である。繰り返すと男は相続財産の管理者であるが、所有者にはなれない。

結婚についても例えばコタ・ガダン出身の女性はコタ・ガダンの男性としか結婚できない。これに対して男性にはそのような制約はない。財産を相続できない男はその替わり自由である。財産を相続する女に個人的な自由はない。

ミナンカバウの母系社会とはいわば女性は田畑や家屋という財産に縛り付けられていることである。母系社会のこれらの実態はむしろ女性差別でないかと教育を受けたミナン人の女性が伝統社会に呪縛(じゅばく)されることの不条理を訴えている。かつまたミナン人は熱心なイスラム教徒である。父権の強いイスラム教の併存は奇妙な現象であるが、アダット(→588)が優先することでなんとか折り合いをつけてきた。

最後に母親を軽んじるとどんなことになるかというミナンカバウの民話を記しておく。マリン・クندان(Malin Kundang)は故郷を離れて異国の地で金持ちの娘と結婚する。帰郷した際に母親があまりにみすぼらしかったため知らないふりをした。母親に呪いをかけられてマリン・クندانは石になった。ミナンカバウ人の諺によれば「天国は母の足の裏にある」そうだ。

⇒569.女性上位社会

## 611. ムランタウ/異郷遍歴

ミナンカバウ(略してミナン)人の定義は「1人では故郷を後にする、2人ではパダンレストラン(→764)を開く、3人では契約書を作る、4人ではメッカ巡礼に行く、5人ではアッサラームアライクムのお祈りをする(庵浪人



HP)」ということである。

最初の故郷を後にする風習はムランタウ=merantau<sup>7</sup>または単にランタウといわれる。ミナン人の男子は 12～15 歳になると生地を離れて諸国遍歴に出かける。異郷で身を立て、数年後、お金や手に一杯の土産を持って立派な恰好をして故郷に錦を飾る。ムランタウは一種の出稼ぎであるが、閉鎖社会における風通しの役割もある。

母系社会で有名なミナン人の男性は生活資金を作る能力があることを証明できないと故郷に帰れないし、結婚もできない。ムランタウに出かけない男、成功しない男はミナン社会の落ちこぼれである。

ムランタウの出稼ぎ先は当初はスマトラ島内であったが、植民地経済社会の拡大により、島外にも広がった。同じオランダ植民地政府下のジャワ島には商売の機会も多かった。ミナン人は華僑に匹敵するだけの商才に恵まれているので、インドネシア各地に割拠し流通を牛耳る華人の商才もミナン人の本拠地の西スマトラでは影がうすいといわれる。

インドネシアで頭のよい詐欺師にあえばミナン人に違いないという。これは多分にして他民族のやっかみであろう。

ミナン人の進出分野は商業に限らない。時あたかもインドネシア社会の近代化の過程で都市における頭脳労働のニーズとミナン人のムランタウが一致した。そのうち故郷を出たミナン人は成功しても故郷に戻らずに積極的にジャカルタに留まるようになった。ジャカルタの民族別平均所得はミナン人の所得が最高といわれる。

ジャカルタに移住したミナン人は父母を中心とする核家族とならざるをえない。異郷の大都会では母系社会のアダット(→588)は非現実的である。移住の第一世代にはまだしも故郷とつながりがあっても、異郷で育ったその子供以下の世代になると母系社会とはさらに縁遠くなる。

近代社会の発展による都市化の影響は 1974 年の婚姻法の影響もあり、故郷の西スマトラでも核家族化しつつある。伝統と近代化への妥協ということで、最近では結婚して数日だけは妻の家へ通うということで母系制を形式的に残している。母系社会のシンボルであるルマ・ガダン(→938)も新しく建築されるものはない。

ムランタウの発展はインドネシア社会との同化の過程をへて世界でも珍しいミナン人の母系社会の崩壊に向かっている。それでもミナン人の家庭は母は“カカア天下”といわれ、夫の妻子扶養義務意識が希薄といわれてはいる。

今、総計4百万人といわれるミナン人の 40%はスマトラ島外に居住していると推定されている。そのうちミナン人の最も多い都会はパダンよりもジャカルタということになるだろう。

## 612. 歌うスンダ人

人口2千万人の「スンダ(Sunda)人」はジャワ人に次ぐインドネシア第二の民族集団である。スンダ人は西部ジャワに、ジャワ人は中部ジャワと東部ジャワにとすみわけている。

<sup>7</sup> ミナンカバウ人のムランタウは一般的にはバベロという行商人である。ムランタウはミナン語である。ジャワ語で同義の“boro”という語がある。

タシクマラヤの近くにナガ(Naga)村<sup>8</sup>はスンダ人の伝統を伝える村として有名である。100 戸程の家があり約 400 人が居住する。東西軸の家が軒を接している。木、竹、藁だけを材料とする伝統様式のため電灯もない。



ジャワ島ではジャワ人が人口において圧倒しているため、スンダにおいてもジャワの影響が強い。スンダ人にはジャワ人への対抗意識があってもそれは潜在しており両者は共存の関係にある。しかし、民族の気質などの差から両民族の間関係はいわくいいがたいものがあるらしい。スンダ人とジャワ人の結婚には両方の保守的な親は乗り気でない。

両者の対抗意識は歴史からも窺える。スンダ人の誇りはパジャジャラン王国(→260)である。ジャワ人のマジャパヒト王国(→248)が東南アジア島嶼世界を制覇した時もスンダ人のパジャジャラン王国は独立を堅持した。

パジャジャランの名の由来はマジャパヒトと対等という意味らしい。スンダ人の誇りである王国の名は『パジャジャラン大学』であり、またパジャジャラン王国の英雄シリワンギ王(→260)の名は独立戦争においても勇名を駆せた『シリワンギ師団』の命名の由来となっている。

独立後、インドネシア屈指の英傑としてインドネシア全土にガジャ・マダ(→335)の名の命名は多い。しかしながらバンドゥンを始めスンダ人の都市にはマジャパヒトの為政者の名を賛えた通や建物は一切見当たらない。5百年前のシリワンギ王の謀殺は今にいたるもスンダ人のジャワ人に対する消えない遺恨(いこん)となっている。

スンダ人はジャワ人より熱心なイスラム信仰であるのはジャワ人への潜在的対抗意識があろう。西部ジャワが震源地であるダルル・イスラムの反乱(→332)もスンダ人の反ジャワ感情を無視しえない。

西部ジャワで水田耕作は比較的新しく、中部・東部ジャワのように稲作社会が熟成していない。西部ジャワは色々な面でスマトラとジャワの間である。地理上の位置がそうであるようにスンダ人は気質的にもジャワ人とスマトラの諸民族の間である。

インドネシア人のパーティでも上品で洗練されているジャワ人ばかりだと気詰まりになるが、スンダ人は明るく楽天的、外向的であるため、彼らがいるとにぎやかで適度に盛り上がる。

ジャワ人との比較での話であるが、結婚観も緩やかで離婚が多い。ジャワ人の結婚相手は親が決めるが、スンダ人は本人が決める。女性は男好きであり、男性は女好きであり好色との評判がある。子供の数も多い。女性はマナド(→207)と並ぶ美人の産地である。スンダ人の容貌では二重(ふたえ)瞼(まぶた)が目立つ。

⇒105.パスンダンの地

### 613. スンダ文化

スンダ人にとってプリアンガンはジャワ人のクジャウエン(→119)にも相当する。スンダ文化の基盤はプリアンガンにあるタンクバン・プラウ山(→109)にちなむサンクリアン神話と英雄シリワンギ王の登場するパジャジャラン王国史話(→260)である。

もう一つのスンダ文化のキャラクターである「カバヤン(Kabayan)」はスンダ説話の主人公である。ロシア民

<sup>8</sup> ナガ村はスンダ文化の純粋培養地として観光地にもなってきたが、観光化がすすむにつれて色々な問題が生じてきた。

話のイワンのような存在であり、ジャワ人の生み出したスマル(→906)と対称的である。スマルは深遠なる哲学を語り、カバヤンは万人が理解できる寓意を語る。ジャワの抽象性に対するスダの具象性であろう。



ジャワ人のゆっくりとした話し方に対して、スダ人の話し方は歌うようである。パントウン(→962)という韻律の4行詩はマレー語のみならずスダ語でも盛んである。スダ人は即興でパントウンを歌う詩人である。

スダ語の話される地域がパスンダン(→105)であるが、プリアンガンといわれる内陸部のスダ語が洗練されている。沿岸部のバンテン(→115)、チルボン(→118)のスダ語は外来語の影響を受けている。

16世紀にスダはマタラム王国(→250)に制圧されて以来、その支配下になった。貴族階級はジャワ人との婚姻をとおしてジャワ文化の影響は強い。スダ貴族の称号はメナック(Menak)である。スダ語もジャワ語とかなり似た敬語体系が複雑な言語である。

ジャワのようにプリアイ、サントリ、アバンガンというほど明らかな階層はないが、かなり似た社会構造である。ジャワ語のハルス(→634)に相当するのがレムスである。カサルはスダ語でもカサルである。

スダ文化はジャワ文化と共通しながら差も見られる。例えばワヤンはジャワがクリット(→904)であるのに対してスダではゴレック(→907)という木偶人形である。また打楽器からなるジャワのガムラン(→910)に対してスダのガムランは管楽器の活躍が目立つ。

ジャワのガムランの演奏にプシンデンの歌が伴うことがあるが、スダでは歌が主でガムランは伴奏である。スダの古典歌曲で親しまれているチアンジュランがある。スダの伝統歌謡は沖縄民謡に似たもの悲しさがつきまとう。

「クトゥック・ティル(kutiktil)」はゴング主体の小編成のガムランに合わせて踊るスダ伝統の民衆舞踏であり、1975年にググム氏が始めた。女性の踊り子はロンゲンといい、艶かしいスダ美人である。クトゥック・ティルのビートを現代風にし、シラット(→827)を取り入れて動作をシャープにしたのが「ジャイボンガン(jaipongan)」である。

ジャイボンガンはクンダンに合わせて踊る舞踊音楽である。インドネシアの大衆芸能として人気が高い。全国区進出のスダ文化には音楽分野が著しい。ラグ・ポップといわれるインドネシア現代音楽の多くはスダ起源である。歌が聞こえるとスダ人は踊りだす。

⇒106.プリアンガン

## 614. マドゥラ人

東部ジャワ北岸にあるマドゥラ島は平地が多いように見えるが、石灰岩性土壌のやせた土地である。対岸のジャワ本島が火山性の肥沃な土壌であるのと対称的である。その上、マドゥラ島は雨も少なく、保水性が悪いので農業も制約されている。

「マドゥラ(Madura)人」はジャワ人とは別民族であり言葉のみならず気質も異なり、「柄が悪い」「気をつけろ」「田舎者」と警戒されるのは故郷であるマドゥラ島の厳しい風土と関係があるだろう。言いかえればマドゥラ人は独立心が強く活動的で武勇に秀れている。



プラムディヤ・アナンタ・トゥール著の大河小説『人間の大地(→975)』では主人公のジャワ人が《ハムレット型》であるのに対してマドゥラ人の執事は《ドン・キホーテ型》としての描写はこの両民族の一つのパターンを表しているようである。

過去ジャワ島との歴史においてマドゥラ人は中国と北方の遊牧民のような関係と考えると理解しやすい。マドゥラに王国はあったが、完全独立の時もあり、ジャワに従属している時もあった。ジャワがマドゥラ島を支配しても単なる覇権にすぎないが、手を抜くとマドゥラはしばしばジャワを侵略した。トルノジョヨ王子(→263)はマタラム王室のプサカ(→704)を奪ってマドゥラ島へ持って

帰ったこともあった。

このようなマドゥラ人はオランダ支配の下では蘭印軍の傭兵となった。ジャワ人を支配するためにオランダはキリスト教徒のアンボン人(→622)、マナド人(→620)を重用し、それに準じる位置を占めていたのがマドゥラ人である。

オランダ植民地支配当時に多くのマドゥラ人はプランテーションの導入による土地開発に併せてジャワ島の東海岸に移住した。現在のマドゥラ人の居住地はマドゥラ島と東ジャワの北海岸部であり、“マドゥラの馬蹄形”といわれる。

ジャワ島に移住したマドゥラ人はジャワ人の村に周辺に居住している。マドゥラ人のいる所はジャワ人が農業に適さないので放置していた場所である。厳しい条件だけに一層働かないと食べていられない。マドゥラ人は辛苦して働く、船員になるマドゥラ人も多い。

マドゥラ人は執念深く一族の団結心が強い。したがって一人のマドゥラ人と喧嘩をすれば 30 人のマドゥラ人を敵にまわすといわれる。

宗教では比較相對の関係であるが、イスラム教徒であるジャワ人・マドゥラ人の間ではマドゥラの方が熱心なムスリムであり、ジャワ人を軽蔑しているのではなかろうか。

今日では 600～700 万人というマドゥラ人の半分以上は島外に居住している。東部ジャワではマドゥラ人はジャワ社会に融和しており、両者の間の緊張は伝えられない。

しかし最近では西カリマンタン州や中カリマンタン州に移住したマドゥラ人が原住民であるダヤク人(→624)と軋轢(あつれき)を起こし両者の死傷事件(→738)が相次いで起きた。ダヤク人にはマドゥラ人の“あくの強さ”が耐えられないらしい。

⇒151. マドゥラ島

## 615. シリッのブギス人

スラウェシ島の最有力の民族の「ブギス(Bugis)人」は南スラウェシ半島の低地平野部に分布して水田耕作以外に漁業、養殖業、マングローブ林業、製塩業を行う。ボネ、ワジョ、ルウ、ソッペン、シデンレン、ラッパンの部族に分散しており、この中ではボネ・ブギスがブギスのメジャーである。ブギス人はスラウェシ島のボネ湾の最奥から東南半島の湾沿いにも広がっている。こちらはルウ・ブギスといわれる。

ブギス人でもボネ・ブギスとルウ・ブギスは別民族であるかのように生活様式が異なる。前者ボネ・ブギスの

稲作社会に対して、後者ルウ・ブギスはサゴヤシ社会(→770)である。インドネシアの食物に基づく両社会の境界がブギス人社会を引き裂くような形でスラウェシ島を縦断している。



南スラウェシ半島は地形と気候から景観の変化が大きく、焼畑と水田が併存している。稲作社会の辺境のような条件がブギスの移動型分散社会の色彩をもたらしたのであろう。ブギス社会はマカッサル人(次項)の影響を受けて、ブギス人を商人にし海洋民族として移住に駆り立てた。海洋民族であることは商人であると同時に時

としては海賊にも変身する。

東インドネシアの諸島では集落が海岸から離れた内陸部にあるのが一般的である。かつてブギス人の乗った帆船(→854)が沿岸を荒らしていたころの後遺症である。貧しい島々でこれといった交易商品のない所へくるブギス船は人を捕えては奴隷として売り飛ばすことを業としていた。このためブギス船とは“人攫(ひとさら)船”として恐れられ、島民は海岸に居住することを避けた。

何れにしる海洋民族の気質として気性が激しい。南スラウェシで発生する人口当りの殺人事件の件数はインドネシア平均の6倍になりインドネシアでは最も高い。刃傷沙汰の多いことが数字的に裏付けられている。

殺傷事件の背後には「シリッ(Siri)」という気質がある。シリッとはブギス/マカッサル語で“恥と名誉”の意味である。恥を与えられたならば必ず報復して名誉は回復されねばならない。これがブギス人の気質である。

男に求められる生き方が強烈すぎるため、ついていけない男には男であることから下(おりの)生き方も許容されており、その受け皿がある。ブギス人にはビシュという女装<sup>9</sup>で先祖を崇める儀式を行う職能集団がある。ちなみにジャカルタの一角にバンチといわれるオカマの出没で有名な所がある。インドネシアにバンチが多いのはブギス人という供給源があるからであろう。シンガポールのブギス通りは男娼街として有名であった。

ブギス人の旧社会階層は三層からなっており、トップの旧王族貴族はダトゥ、プアン、アンディ(Andi)の称号を持っており、今もなお尊敬されている。

⇒202.ボネ・ブギス人の故郷

## 616. マカッサル人

南スラウェシ半島の平地に陣取るマカッサル、ブギス、マンダル(Mandar)の3民族は造船術と航海術に秀れた海洋民族であり、また熱心なイスラム教徒である。マンダル人は山から海に下りて混血したトラジャ人(→618)という説もある。「マカッサル(Makassar)人」とブギス人は言葉が近いので同一民族と見なされることが多い。

マカッサル、ブギス人は共通する「ラ・ガリゴ(LaGaligo)」という民族神話を持っている。天孫降臨神話は文学性の高い叙事詩で世界最大級の文学という評価もある。ロンタラというマカッサル/ブギス固有の文字で記されている。

<sup>9</sup> 女装のブギス人男性はチャラバイといわれる。チャラバイには儀式的職能があり、社会的に認知された存在である。伊藤真「女になる病気」



半島中央の肥沃地で農業を営むブギス人に対して、マカッサル人の占拠していたのは半島の先端で農業には条件の悪い土地であったが、海に面していたことから早くから海へ進出していた。商業を基盤にマカッサル人の築いたゴワ王国の覇権は東インドネシアに広がりヌサ・トゥンガラ列島を属国化していた。ちなみにマカッサル市はマカッサル人の領域の北限になり、居住者もブギス人が大半である。

これに対して農業中心のブギス人のボネ王国(→268)は政治的にはマカッサル人のゴワ王国に従属していた。ブギス人はゴワ王国のマカッサル人からの解放を求め、オランダの VOC(→272)と連合してゴワ王国を滅ぼした。

ブギス人とオランダの連合軍に破れたゴワ王国の貴族は一族を率いて海外に移住した。戦いに敗れたマカッサル人は敗れた地に留まることを潔(いさぎよ)しとしない。このへんにもマカッサル人の気質が表われている。マカッサル人の海外移住に従い、元は農民のブギス人も海に出るようになる。

マカッサル人の気性の荒さはブギス人の勇猛果敢を上回るらしい。マカッサル人は「戦う以外は寝ている」といわれる直情径行の民族である。シリッ(前項)に伴う殺傷事件はブギス人を上回る。やがて移住先でも人口の多いブギス人がマカッサル人を上回るようになる。この結果、スラウェシ島の海洋民族は言語、文化、気質においてよく似ていることから移住先ではまとめてブギス人とみなされる。

今日ではマカッサル人とブギス人はインドネシアの中では同地域の同文化の民族として連携を保たざるをえない。したがって両民族の間の過去の確執は消えているようであるが、いわく言いがたいものが残っているという観察もある。東北の津軽 vs 南部、信州の北信 vs 南信の間よりは深刻らしい。

マンダル人は半島の付け根の海側のマジエネ(Majene)からマムジュ(Mamuju) 一帯に分布する。人口約 20 万人、海洋民族で漁民が多い。サンデ(sande)舟などに独自の海洋文化が見られる。古い民俗はトラジャ人と近いが、イスラム教改宗後は文化的にはブギス人やマカッサル人に近い。南スラウェシの西海岸を移動するとマカッサル人・マンダル人・ブギス人の村々の文化の相違があつて面白く感じられるらしい。

⇒267.ゴワ王国

## 617. 海外への雄飛

VOC(→272)がゴワ王国(→267)にオランダ人以外のヨーロッパ人を追放するように圧力をかけた際に「神は大地を創り人々に分け与えたが、海は万人のものでその航海を妨げるものはない」と一蹴した。

マカッサル人(前項)とブギス人(前々項)は東南アジアの海洋民族である。南スラウェシ以外では両方まとめてブギス人といわれている。

東南アジアの港にはブギス通、ブギス街というブギス人居住する一角がある。シンガポールのブギス町の名前もブギス人の居住地であったことを示す。最近のブギス町はもっぱら男娼で有名であるが、ブギス人と男娼は関係なくもない。

ブギス人は勇猛であり、マレー半島のスルタン家に傭兵として入りこみ、やがて廷臣から重臣となりスルタン家を乗っ取った例がジョホール家、セランゴール家である。マレーのスルタン王家は政略結婚や何やかや

でブギス人の血<sup>10</sup>を受けていないものはない。

このようなブギスの外地への進出のパターンについては、①舌先、②ペニス先、③剣先、といわれる。その意味はまず弁舌による商才を発揮するが、それが駄目な場合は土地の有力者の娘と婚姻関係を結ぶ、それでもかなわない時は武力に訴える。

スラウェシ島の農村から航海民族としてブギス人が海外に雄飛する契機となった歴史的背景は2回あった。①17世紀以降のオランダのスラウェシ島侵略と、②インドネシア独立戦争時の混乱である。

何故、もとは農業民族のブギス人が移住民として他郷に進出し、あるいは航海民族として海へ乗り出したかの一つの回答はイスラム教の影響であろう。熱心なムスリムはメッカに志向し移住を厭わないので定着志向が弱くなる。

カリマンタン島、スマトラ島、マレー半島に移住してコロニーを作る。植民地時代から北オーストラリアやマルク諸島でも商業活動に従事していた。商業活動の一貫として海賊行為も含まれていた。

東南アジアの多島海ともいべき海域への国境の設定は、もともと国家なるものに属していない海洋民族に対して活動の場を制限することである。マレーシアとの国境ができたことからブギス人の活動は東インドネシア、ニューギニア島への進出が多くなっている。

話は飛躍するが、アフリカ大陸沖のインド洋にあるマダガスカル島の住民はオーストロネシア語族(→563)のインドネシア系語族の支族である。マダガスカル島の住民は言語、文化面からブギス人とする説がある。

インドネシアの港にはピニシ船(→854)の面影のあるというブギス特有の型の船が見られない港はない。現在インドネシアの海運業を担っているのはブギス人である。

日本の船会社がインドネシア人の船員を養成するための施設を建設した場所も南スラウェシである。

⇒029.海のインドネシア

## 618. トラジャ人



スラウェシ島山中の下界から隔離された桃源郷のような所に分散して居住しているのがトラジャ人である。高床式住宅と水稲耕作、その他の民俗の共通点から弥生時代の倭人と同じルーツでないかという説(鳥越憲三郎)がある。トラジャ人は自らをトラーと呼ぶ。

伝説によれば中国からルムバン(Lembang)という船に乗って来たという。トラジャのトンコナン様式の屋根は船の型を表している。北を聖なる方角として家の正面が北に面する理由は祖先の来た方向を示すと考えられる。しかしサダン川を北に遡上したことから北を理想郷としているにすぎないという説もある。

トラジャ人は“首狩族”であった。隣の村とは首を狩るか狩られるかという敵対関係にあり統一政権は生まれなかった。このためブギス人やオランダ人など外からの侵攻勢力にもろく、さしたる抵抗もなく屈するか、より山奥へ遁走するかのどちらかであった。

<sup>10</sup> アチェ王国、リアウ王国、クタイ王国の歴史においてもブギス人の進出は王統にまで食い込んでいる。港市国家では実力があれば移住者であっても王として受け入れる基盤があった。この点、領土による権威支配のジャワ王室にはブギス人の入る余地はなかった。

トラジャ社会には貴族、平民、奴隷という身分があった。貴族のトカプ(Tokapu)は 5%であるがほとんどの土地を所有している。商人が多い平民のトマカカ(Tomakaka)は 25%、奴隷である農民のトブダ(Tobuda)は 70%という構成である。この身分は経済的なものを伴うが結局は葬式儀礼における役割の差であった。

宗教はアニミズムに基づく「アルック・トドロ(Aluk Todolo=祖先のやり方)」という先祖崇拜である。キリスト教への改宗者は 80%に達するが、アルック・トドロによる葬式は伝統どおり続けられている。オランダ植民地時代に奴隷制度は廃止され、トラジャ社会で奴隷であった人も都会に出て成功する人も現われる。新たな価値基準は〈身分〉に替って〈富〉である。経済的に成功した人は富をあらん限り注ぎ込んで盛大な葬式を行う。一時寂れていた葬式が最近復活しているこのためだという。

トラジャ人の論理的思考の性格は現代の契約社会への適応度が高いので大学の進学率も高く、マカッサルにあるハサヌディン大学でもトラジャ人の学生数が目立つそうだ。ジャカルタなど都会で成功しているトラジャ人も多い。

トラジャ人として一般に観光で知られているのはタナ・トラジャ県の「サダン・トラジャ族」である。トラジャ族の祖先がサダン川を遡上した際に途中で支流のママサ川を遡上した別のグループがいた。彼らは「ママサ・トラジャ族」といわれる。

両者間は 3000m 級の険しい山脈で隔ており、1200m の険しい山中であることから交通は不便で他文化との接触も少なかった。ママサ・トラジャ族はトラジャの原型と思われる伝統的な形態をより鮮明に残している。「バステム・トラジャ族」はサダン・トラジャ族がさらに東の山脈を超えたグループである。トラジャ文化は生活条件が厳しかった環境対応で変容している。

スラウェシ島の西海岸に陣取るマンダル人(→616)はイスラム教徒であり、海洋民族である。プギス化したトラジャの支族といわれる。

⇒203.秘境・タナトラジャ、939.船型屋根家屋

## 619. トラジャの葬儀

トラジャ人の「アルック・トドロ(Aluk Todolo)」によれば宇宙も儀式も《生と死》に二分され、生と死は同じくらいの比重がある。死者への荘重な儀式はトラジャ人の死生感の反映である。誕生日を迎えずして死した幼児は木の洞(ほら)に埋めるという奇習も知られている。

一連の葬儀は「ランブ・ソロ(rambu solo)」といわれる。身分の高い人の葬儀は準備だけに1年以上にもわたる。王族の葬儀はラパサンといわれ葬送広場で行われる。ランブ・ソロは遺体を安置する建物とその周りに客人の宿泊のための家が作られることから始まる。仮設ではあるがトラジャ様式の建物である。葬式見物のための栈敷も造られる。

トラジャ人の葬儀は必ず故郷で行われる。特にママサ・トラジャ族は自動車も通わない最辺境の地に居住している。もし彼らが異郷で死ぬならば故郷へ帰らねばならない。このため死者に歩かせて故郷へ帰らせる術を持っている。ゾンビの民族といわれる。

死体は防腐処理はするものの臭いはする。死汁を受ける皿もある。死んでから葬式までは日本古代の殯(もがり)の慣習に相当する。鳥越憲三郎説によれば日本人とトラジャ人が倭族という共通項の実例としている。



葬儀には親類縁者はすべて集まる。最近では観光客がホテルで待機している。参列者のために闘牛やボクシングの余興もある。参列者からの贈り物の水牛や豚が次々と葬られる。葬られる水牛の数が葬儀の大きさのメルクマールである。

葬式のため家畜の回復がおぼつかなく借金に苦しむ住民を見兼ねて政府は葬儀の簡略化を命じたこともある。しかしながら最近では盛大な葬式が復活している。葬式による“地域おこし”である。伝統どおり取り行われる場合は観光ショーを兼ねている。観光客の便宜のため、ホテルには葬式の催しの案内がある。TVも礼金を払って取材する。

トラジャの葬儀が有名になり、全国区のイベントになるにつれ、ジャカルタから参列する大臣も多くなった。最近では大臣の数が葬儀の格を表すようになった。

本番の葬儀の時、数々の儀礼・祭宴が開かれる。マバドン (ma'badong) という男性の葬送歌が 20～30 人が輪になり踵 (きびす) で拍子をとりながら昼夜歌われる。単調であるが悲痛な掛け声が印象的である。

葬式の当日、棺桶はトラジャの屋根のついた棺台に置かれて身内の男達に運ばれる。日本の神輿 (みこし) のように揺らしながら四辻では旋回する。靈魂に戻り途が分からないようにするためである。正装の黒服はインドシナ半島山岳部の少数民族と共通する。

トラジャ人は名目はキリスト教徒に改宗しているので、儀式の前後には司祭によるお祈りは「アーメン」を唱えるが、葬儀は彼らの伝統的生死感に基づいて行われる。

葬儀も終了して最後に棺桶はリアンといわれる岩壁の懸崖の横穴に収められる。その前のテラスにタウタウ人形となる。階級に応じてリアンの高さが異なる。

⇒922.タウタウ人形

## 620. ミナハサ人



スラウェシ島の最北の半島の先端にミナハサ県と北スラウェシ州都マナドがある。そこに居住する民族は「ミナハサ (Minahasa) 人」または「マナド (Manado) 人」という。言語的にはスラウェシ島の他民族よりフィリピンのミンダナオ島との関連が強い。ミナハサ人はインドネシアの他の民族と比べ皮膚の色が白い、鼻が高いなど容貌も少し違うと感じるのは北方系モンゴロイドとの混血らしく、そのせいか色が白く特に女性が美しいことで知られている。

最初にミナハサ地方へ来たヨーロッパ人はフィリピンから来たスペイン人であった。しかしスペインの圧政に苦しんだ住民はオランダに頼んでスペインを追い払ってもらった。インドネシアがオランダ植民地になる過程でオランダが住民に頼まれて進出したのはおそらくマナドだけであろう。

オランダの梃子 (てこ) 入れもあってこの地方の住民はキリスト教に改宗し、今日もミナハサ人の90%はキリスト教徒であり、プロテスタントが圧倒的に多い。ミナハサ人は風俗<sup>11</sup>の西欧化が進んでおり、ユーラシアン (→685) が多く、中国系との混血もここでは奇異でない。名前も西欧風に苗字と名の姓名方式に改められた。ミナハサ人の典型的な姓は Lantang、Kawilarang、Gerungan、Rumantir、Mantik、Wowor、Pontoh、

<sup>11</sup> ミナハサ人の文化でインドネシアに蔓延しているものに、動作が容易であるポチョ・ポチョというダンスがある。

Wowungan、Mogot である。

キリスト教への改宗、オランダとの歴史的経緯もあり、オランダ植民地支配に際してミナハサ人は植民地政府の下級官吏、教師として採用され、植民地各地へ移住した。

また、アンボン人(→622)とともに蘭印軍の兵士となった。このようなことから他のインドネシア人からはミナハサはオランダの12番目の州だとか、ミナハサ人は“オランダの犬”と言われて忌避された。

少数民族を取り立てて多数民族の上に位置づけるという民族分断統治は植民地経営の常套手段である。英国はミャンマーで少数のカレン族を多数のビルマ族の上に据え、ベルギーはルワンダでツチ族をしてフツ族を支配させた。これらの国では独立して宗主国が去った後、民族間の対立から内戦になった。インドネシアにおいては北スラウェシの反乱(→378)、南マルクの反乱(→331)程度で収まったことは幸いであった。

西欧化する以前のミナハサ人は勇猛<sup>12</sup>で首狩をしていたが、オランダ時代の文明開化により経済、教育のレベルが高いことで植民地の中で突出していた。この結果、他のインドネシアと比較すると固有の伝統的民族色がうすい。

ミナハサ人は犬を食べる。2～3 歳の黒犬がうまいらしい。毛を剥ぎ香辛料をたっぷり使って焼く。イスラム教徒は豚ほどではないが、犬を忌避しており食べるなどということはない。「犬を食べる連中」というのはミナハサ人に対する蔑称である。インドネシアでよく知られた慣用句に次のようなものがある。「鼠は猫を恐れる。猫は犬を恐れる。犬はミナハサ人を恐れる」⇒207.ミナハサ半島

## 621. フロレス島の民族

東西に長いフロレス島は幾多の民族が居住している。主要民族は西からマンガライ族、リウン(Riung)族、ンガダ(Ngada)族、ナゲケオ族、エンデ族、リオ(Lio)族、シカ(Sikka)族、ララントゥカ族の8族である。最西部のマンガライ族、最東部のララントゥカ族は少し異なるが、中央の6族は共通点が多い。



これらの民族に共通する生態は丘陵や山頂に居住する高地性部族であることである。高地に居住する所以はフロレス海にはブギス人(→615)の海賊船が跳梁し、海岸の住民は攫われて奴隷にされたからである。地形の関係から各民族は孤立しており、島中の各民族間のコミュニケーションはなかった。

オランダ時代に当局は山岳地帯の住民を平地に強制移住させた。インドネシアになっても開発政策は住民の平地への移住政策を引き継いでいる。住民の管理、即ち税金を取りやすくするためであろう。

古い伝統のある集落は山間部に放棄されて姿を消しつつあるが、各民族は非常にユニークな民族の伝統を保持している。伝統的集落に共通していることは村の中央には儀礼的空間の広場がある。そこには巨石記念物と儀礼を行うための建物がある。次第に押し寄せる近代化の波にもかかわらず、このような村はまだ多く残っている。

古代に東南アジア島嶼部へ押し寄せたヒンドゥー文化は西から順次、列島に浸透し、手前のスンバワ島(→214)まで到達したところで留まり、フロレス島にはヒンドゥー文化及んでいない。従ってフロレス島にはヒン

<sup>12</sup> キリスト教布教以前のミナハサ人は勇猛で知られていた。伝統行事である戦争ダンスにかつては首狩りを行った片鱗を伝統の舞踏に残している。

ドゥー以前の東南アジア文化の原形が残っている。フロレス島を含むヌサ・トゥンガラ諸島は民族学研究者にとっては宝庫である。

数多い部族の中で島中央部のリオ族の事例<sup>13</sup>を紹介したい。リオ族は陸稲の焼畑農業に従事している。一段と屋根の高い家がある。高い屋根は先住者であることの誇りを表している。伝統民家の玄関には大きな乳房の装飾がある。家屋全体が女体であると見なしていることのシンボルである。

独特の社会システムとして部族と部族の関係は交換を通して安定する。最大の交換は結婚である。共通して見られる結婚に関する社会慣習は女性をもらう方の一族と出す方の一族が固定しており、逆がありえないことである。

A部族はB部族に嫁を与える。B部族はC部族に嫁を与える。C部族はA部族に嫁を与える。この関係は代々引き継がれる。かなり男性の結婚相手は母方の従姉妹という結婚の形態はヌサ・トゥンガラで一般的な慣習である。バタック人(→607)の結婚も似たルールである。

島西部のマンガライ族にイスラム教は普及しているが、フロレス島民の90%近くの宗教は表面上はカトリックであるが、実質はアニミズム信仰が強い。都市や沿岸部の他所からの移住民はイスラム教徒が多い。

⇒217.フロレス島

## 622. アンボン人

香料貿易の盛んな頃、産地のアンボンへはマレー人、中国人、インド人、アラビア人など色々な民族の商人がやってきて滞在した。ヨーロッパ人はアフリカから黒人奴隷を連れてきた。一般にアンボン人は他のインドネシア人とは外見も異なって色が黒いのはベースとしてのパプア系の血に加えてアフリカ黒人との混血もある。



アンボン人はセラム島(→226)の民族と文化的共通性を有する。しかしアンボン港に集ってきた人々の到来以降、諸民族の文化が重層してできあがった混合文化という意味でコスモポリスタンである。アンボン人の優れた素質はオランダが作ったハイブリッドの傑作という説がある。しかしウオーレス(→971)はアンボン人はオランダに意図的に持ち上げられることによって生じた後天的なものとしている。

ヨーロッパとの接触が早かったことからアンボン人の宗教はキリスト教である。ポルトガル時代の1546年にザビエルがアンボンを訪れている。ポルトガル時代はカトリックであったが、オランダ時代にプロテスタントが優勢になった。

オランダ支配確立後は植民地政府の下級官吏や兵士となって各地に赴任し、インドネシア人に対して支配者側にいるアンボン人は“黒いオランダ人(BelandaHitam)”といわれた。蔑みの意味があったにもかかわらずアンボン人は黒いオランダ人を誇りにした。

植民地時代のアンボン人は英国植民地軍のグルカ兵と同じであり、ジャワ人の記述にも同国人と見なされなかった。蘭印軍兵営の中の隔離された生活でアンボン兵は原住民と比べ相対的にリッチな生活を享受した。

<sup>13</sup> 杉島敬志「乳房のある島」130回みんなくゼミナール

アチェ戦争(→281)などには蘭印軍に兵士として従軍したアンボン人はインドネシア独立戦争の際もオランダ側の兵士として共和国と戦ったため、インドネシアが完全に独立した際に難しい立場に追い込まれた。

ハーグ協定(→330)によってインドネシア共和国軍に吸収されることになっていたが、折からの南マルク共和国(→331)の反乱に共鳴し、共和国軍への編入を拒否した。その間に行く先のなくなったアンボン兵がオランダへ移住(→692)を余儀なくされた。

中にはスカルノ政権時代にはレイメナ(→331)というアンボン人が中央政界で副首相を務めたことがある。今日の第一線にアンボン人はほとんどいない。せいぜい目立つのはエンターティナー方面である。

イスラム教は歓楽街の存在を認めていない。そもそも酒場や賭博場はイスラム教徒には御法度(ごはつど)である。従ってその間隙にアンボン人が入る。ジャカルタの歓楽街のプレマンといわれるヤクザはアンボン人が多い。単なる異教徒という以外の理由でアンボン人はインドネシア人に嫌われている。

近年のアンボンで起きた宗教対立からの暴動事件(→737)は古くからのキリスト教徒と移住者を主とするイスラム教徒の対立であった。イスラム教徒が増えてアンボン人の構成が複雑になった。⇒225.アンボン港

### 623. 資源保護のサシ

熱帯の自然は豊富であるから無尽蔵のようにおもわれていた。実はそうではないというのが今日の資源問題であり、環境問題である。

東インドネシアには「サシ(Sasi)」という社会慣行によって資源に対して捕獲の節度を設けて資源を保護してきた。サシとは「休ませる」という意味である。

サシは東インドネシアのマルク州周辺で見られる社会規範である。地域によってサシと異なる言い方もあるが、一定期間、特定の天然資源の採取や破壊を禁止し資源利用の持続性を守り、将来の収穫の増大を保証するための禁制である。

その具体的な例として紹介されたのがアンボン島(→225)の東隣の小さな島であるハルク(Haruku)島のサシである。ハルク島へはロンパという小魚が定期的に押し寄せてくる。ロンパの乱獲を防止するため捕獲を時期、場所、方法を定め、それ以外を禁漁にする制度である。長老が取りしきり村人が協力して行う村の儀式がTVでも紹介された。

サシの社会的慣習は違反者に罰金を課し強制力を伴う。環境保全のための自主的に運営される制度は生活慣習も規制する。さらに拡大して礼儀作法もサシといわれている。

別の島のサシではナマコの漁業を行う場所を決める。未成熟のものを採取しない。網の目の大きさも決める。セラム島(→226)では蛋白質の補給にクスクスという有袋類の動物を捕獲するが、その狩猟にもサシの慣習がある。

サシがあれば北海道の鯨漁業は存続したに違いない。地球規模の資源保護の観点から東インドネシアのマイナーな民族が維持してきたサシの社会制度が持つ英知が評価されている。私は住民がサシを守ってきた理由は祭祀の一環であり、祭祀のサシは結果として資源保護となっていると考える。

鍵谷明子著『インドネシアの魔女』にヌサ・トゥンガラ諸島のサブ島(→223)で行われる祭祀についての観察がある。それによれば農作物の収穫の前に海にタブーが課せられる。禁漁の期間、区域が定められる。森へ入ることが禁じられるタブーもある。理由は祭られる先祖が静寂を好むからである。これを破ると病気や何らか

の災難に襲われるという強固な信仰に基づく祖先崇拜の祭祀である。

祭祀のタブーをサシと読み替えるとサシの本質が分かる。ただし本件は原著者への断りも無く著者が勝手に読み替えたものである。

日本にも鎮守の森があった。そこでは樹を切ったり、鳥獣を捕獲することはタブーであった。今、日本では開発の海の中で孤島のようになった鎮守の森はその存在すら危ぶまれるようになった。

サシによって乱獲は未然に防止され、生活資源は温存されてきた。しかし最近の商品経済は東インドネシアの海域社会にも浸透してきた。バイクや TV のような人の欲望をあおる商品の出現がサシを脅かすようになった。住民は大事に守ってきた資源を一時的物欲にとらわれて売り飛ばしたいと思うようになり、商品経済の浸透でサシも危機に瀕している。

## 624. ダヤク人

カリマンタン島のプロト・マレー系(→565)の先住民が「ダヤク(Dayak)人」である。先住民でもイスラム化すればダヤク人でなくなる。総人口約百万人は多くの種族に分れて広い内陸部の山岳地に分散している。外部の人間がダヤク人と総称しているだけで彼らに同一民族としての自覚があるわけではない、むしろ種族間の争いを繰り返してきた。



種族間の敵対の最大の原因は“首狩り”の蛮行であった。手に入れた首は収集品として大事に保存された。首は守護神として御札(おふだ)のようなものらしい。

その他のダヤク人の奇習は“刺青(いれずみ)”と“耳飾り”である。体中に丹念に文様の刺青を行っているので裸でいても服を着けているように見える。指の先まで手袋と見間違えばかりの刺青である。耳飾りも特大のものを付ける。このため耳朶(じだ)が大きくなって肩まで垂れ下がる。

ダヤク人は木彫り、イカット(→928)など民族の伝統を伝える手工芸品に優れている。また、150m 以上にも及ぶロングハウス(→941)に一族がアパート方式に住む風習が珍しい。

吹き矢(→663)による狩猟が蛋白源である。ちなみにカリマンタン島以外のニューギニア島のなどの未開民族では弓矢による狩猟である。

ダヤク人は一般のインドネシア人と比べると肌の色は白い。イバン族が酒を回し飲みして禪(ふんどし)姿で阿波踊りのように踊るところは日本の宴会そっくりである。

ケニヤ族、カヤン族は人口も少なく小集団で中央から東の山岳に分散しているが、ダヤク固有の文化を墨守している。かれらの居住する島中央部の秘境であるアポカヤンが観光地化しつつある。

ダヤク人は、今、押し寄せる文明の波の中でダヤク固有の文化を喪失しつつある。伝統で伝えてきた耳飾りや手足の先にいたるまでの刺青の文化も青年には忌避されている。青年は都会の文化に憧れてロングハウスを出たきり帰ってこない。

イバン族はマレーシアのサラワク州から西カリマンタンに広がっている代表的ダヤク人である。焼畑農業(→882)による陸稲栽培がダヤク人の一般的生計であるが、イバン族の一部の部族では伝統の棚田による水稲栽培も行っている。

サラワク州ではイバン族を中心として政治的結合が図られてきた。インドネシアでも中カリマンタン州がダヤク人の政治要求の高まりから成立した。しかしカリマンタン島へはジャワ島からの移住民が押し寄せ、資源のもたらず富はジャカルタを潤しており、先住民のダヤク人が疎外されていることは否めない。

近年の西カリマンタンや中カリマンタンの民族紛争(→738)では移住民であるマドゥラ人と対立している。ダヤク人はバラン(蛮刀)や槍でマドゥラ人を攻撃し、狩られた首の写真がインターネットに掲載されて世界にショックを与えた。インドネシア体制下で鬱積(うっせき)久しいダヤク人の先祖返りであろうか。

⇒196.アポカヤン

## 625. 首狩の風習

ヘッドハンターの語源はボルネオの“首狩族”であり、ダヤク人の中で「イバン(Iban)族」は首狩族の代表としてその悪名は世界に鳴り響いていた。首狩の慣習は多くのダヤク人に共通しており、インドネシアではカリマンタン島のみならずトラジャ人(→618)やミナハサ人(→620)も首狩の慣習があり、ヌサ・トゥンガラ諸島、マルク諸島でも行われていた。

イバン族の男は青年になるとブジャライ(bejalai)に出かける。ブジャライとは首狩りが目的の放浪の旅である。勇士の首を持ち帰ってはじめて一人前の男として認められ、求婚の資格<sup>14</sup>ができる。近隣部族との摩擦を避けるため、同一河川の流域では首狩りをしないというしきたりになっていた。

首狩の慣行は頭には生命力が宿り、生命力は持ち運びできるという信仰<sup>15</sup>に基づくものである。今日でもロングハウス(→941)には汚れて黄ばんでいる数個の頭蓋骨が籠に入れて天井からつるしてある。この首は必ずしも首狩りの戦果ではなく、身内の首をこのようにして保存しておくのが供養である。多くの頭蓋骨があっても誰のものか見分けがつかない。

カリマンタン島の北側のサラワクにやってきた白人ラジャ(王の称号)のブルックは原住民の文化を尊重したが、首狩りの蛮行を黙視しえず、これだけは止めさせるという姿勢で臨んだ。イバン族はこの条件を受け入れてブルックの軍門に下った。こうして成立したサラワク王国は今日のマレーシアのサラワク州になった。

オランダ領側のイバン族でも首狩りはあったが、近代文明の浸透による社会緊張がサラワク側ほどでなかったためか、悪慣行は自然になくなった。オランダ植民地政庁の治世というよりはキリスト教の布教の成果であった。

ところで日本人も首への執着が強いように思う。中世の合戦は相互の大将の首取りゲームの要素があった。また獄門という死刑にした上になおかつその首を晒すという刑罰には単なる“死”以外のものを首に価値づけているからである。

江戸時代の赤穂浪士の討ち入りも吉良上野介を殺すことではない、首をとることに復讐の意義がある。吉良上野介の首を下げた行列を誇示し、浅野内匠頭の墓前にその首を供えて復讐のセレモニーが終了する。

桜田門において水戸浪士によって井伊大老は暗殺された。水戸浪士が求めたのは井伊大老の死そのもの

<sup>14</sup> ニュー・ギニア島の首狩は首を狩った相手の名前を自分の子供に与えるためという。

<sup>15</sup> ) 西欧のハンターが狩で仕留めたムースや鹿のような獲物の首の剥製を壁に飾るのは単なる示威であるが、ダヤクの人間の首は信仰である。

のではなくこれもまた首である。明治になっても西南戦争で敗れた鹿児島軍は大将である西郷隆盛の首をとられないように隠した。戦争は負けても大将の首は取られないという鹿児島士族の意地である。

日本とカリマンタン島の間になる台湾の高砂族も 20 世紀まで首狩りを慣行とした。日本人の首へのこだわりもその延長にあるような気がするが、民俗学の泰斗(たいと)柳田国男先生の膨大な著作にも日本人の首への執着についての言及は残念ながら一言もない。

## 626. パプア系民族

インドネシア人の民族構成は多様であるが、大別すると①マレー系民族と②パプア系民族になる。人口の比率からいえば①のマレー系が圧倒的多数であるため、一般にインドネシアとはマレー系民族の国と認識されている。

ニューギニア島の原住民はインドネシアでマイナーであるパプア系であり、マレー系とは言語系統において全く異なるのみならず人種的にも別である。民族とは文化概念であるから身体の外見からは判断しえないが、人種の相違は外見から明らかである。パプア系は肌の色はチョコレート色であり、頭髮は縮れ、彫りの深い顔である。ダヤク人はジャワ人に変装できるが、パプア人はジャワ人に変装はできない。

パプアとはマレー語の「pepuah＝縮れ」という髪の毛を表した言葉であり、縮れ毛の民族に対する蔑称のニュアンスがある。しかし次第にインドネシアからの独立を願望するようになった住民はインドネシアによって与えられたイリアンの名を忌避し、イリアン州はパプア州と改名され、自らをパプア人と名乗るようになった。

19 世紀に東インドネシアの地域を放浪した生物学者のウォーレスは紀行文『マレー諸島(→971)』で両民族の性格を観察して次のように記している。

「マレー人の性格は無感動である。彼は打ち解けず、内気で、はにかみ屋で、感情を大袈裟に表さない。しゃべることがゆっくりと慎重で議論することにまわりくどい。金銭に関わる事柄で容易に争わない。日常的な冗談はこのまない。これに対してパプア人は多くの点でマレー人と反対である。パプア人は会話や行動が衝動的で大袈裟である。パプア人は大胆で、がむしゃらで、興奮しやすく騒々しい。愉快で笑うことがすきで、自分の感情を抑えることができない。マレー人は背が低く、褐色の皮膚で、真っ直ぐな髪の毛を持ち、髭がなく、滑らかな体をしている。パプア人は背が高く、黒い肌で、縮れた髪の毛、髭があり、多毛な体をしている。前者は幅の広い顔で、小さな鼻、偏平な眉毛を持つ。後者は細長い顔で、大きな目立つ鼻を持ち、突き出た眉毛がある。」

ここでウォーレスのいうマレー人とはジャワ人に代表されるマレー系民族の意味であり、今日の狭い意味におけるマレー人ではない。また彼の観察したパプア人とは東インドネシアの民族を総称している。

アジア大陸とオーストラリア大陸の動物相の移行地帯という意味でのウォーレスシア(→039)の概念は人間にもあてはまる。マレー系とパプア系の境界は線では示し得ない。ハルマヘラ島(→230)の言語地図はまだら模様である。東西に細く繋がるヌサ・トゥンガラ諸島の住民はマレー系とパプア系の混血の移行地帯である。東に進むとマレー系からパプア系の血が少しづつ濃くなる。

マルク諸島では人種的にパプア系であっても言語系統からはマレー系は優勢である。ニューギニア島沿岸のパプア系住民においても、特にチュンドラワシ湾一帯の住民の言葉はオーストロネシア語族系(→563)言語である。

## 627. ニューギニア高地人

マレー系民族と比較してニューギニア島原住民であるパプア系住民は身体的には毛深いなどの特徴がある。メラネシア人説もあるが、彼らがどこから来たかは分からない。マレー系民族が大陸から南下してくる以前にインドネシアに分散していたともいわれる。オーストラリア原住民のアボリジニとの共通点も指摘されている。

住民は島の北海岸部と山間部で大きく異なる。北海岸部は外界文明の影響を受けている。言語もオーストロネシア系(→563)の影響が大きい。これに対して内陸部の高地の住民は険しい山という自然条件によって外界と隔絶している。高地では谷毎に部族が異なり、言葉も通じない。方言の差というより別の言葉らしい。言語はパプア系であるが言葉の数も調査中である。

バリエム盆地の「ダニ(Dani)族」はニューギニア高地人の代表的な部族としてよく知られている高地人の1部族である。20世紀前半まで石器時代の生活をおくっていた。ホナイ<sup>16</sup>という円形の藁葺きの小屋に住み、コテカ(→790)というペニスケースだけを身につけた民族である。

ダニ族では村と村は敵対関係にあり、しばしば戦争が行われた。性格は誇り高く勇敢である。彼らの社会構造は実力者が首長になって権勢をえる。家門とか家柄はなく首長の子供に首長の地位を継ぐ特権はない。実力者とは戦争に強く、殺した敵の数が多き者である。死去すると遺品は完璧に分配される。このような意味で完全民主主義といえる。

土壌がバリエム盆地ほど肥沃でない盆地の周辺の山岳部では人口密度も少なくヤリ族(→664)のように人体そのものが小型でピグミーの背丈しかない。

海岸からは湿地と峻険な山脈に阻まれて陸路はなく、盆地の中心地のワメナへの交通は飛行機だけであった。不思議なことには海でしかとれない“宝贝”が通貨代わりに使用されていた。海岸部からどういう経路で持ち込まれたか分からない。

この数十年間にもたらされた近代文明によって石器時代から一躍近代に飛躍し、ダニ族は変身した。ワメナの町ではダニ族の男は文明化でコテカに代わりパンツをはくようになった。たまにコテカ姿の男がいて観光客が記念撮影すればモデル代を厳しく請求される。

自給自足で暮らしていた民族が一気に商品経済に巻き込まれた。文明の品を入手するためには現金収入が要る。農業の生産性が高まったわけではない、かれらが稼ぐ唯一の収入は“観光”であった。模擬戦争の戦闘ショーを見せる、ミイラ<sup>17</sup>を見せる、石器をみせる、コテカ姿の写真を撮らせる、等々である。

文明とともにもたらされた最大の害悪はアルコールである。ダニ族の男がアルコールを飲みだすととめどがなくなり、最後は暴動沙汰になるので販売禁止されている。ワメナ行き飛行機はアルコールの持込み防止の

<sup>16</sup>・高地ニューギニア人のホナイという円形小屋は真ん中にあるトンガリ帽子の草葺の屋根の大きな小屋は男の家であり、周りを女の小さな小屋が取り囲んでいる。遠くから見るとメルヘンの世界である。・一夫多妻で女同士の人間関係は良好である。色々な調査でも女の間の嫉妬というものがなく、セックスの意味が異なるらしい。女は豚と同居しており、子豚に乳もすわせる。かれらにとって豚は最大の資産である。アメリカのサージャントという女性の人類学者がバハリムのワメナで調査で知り合ったオバハロクの族長と結婚し、番目の妻になって驚かせた。

奇習の一つは女性は近親者が死ぬと弔慰を表すため第二関節の指を切り落とす。道具は石斧という。多くの近親者がなくなるとその分だけ指が短くなる。日本のヤクザの風習との関係はつまびらかでない。指が全部なくなると仕事にさしつかえるから・本づつ残す。指で足りなくなると耳で補う。

<sup>17</sup> ダニ族は死んだ祖先をミイラにして保存した。その技術は高度のものであったが、近年では断絶しつつあるらしい。



検査が行われる。禁止されても密売されているので結局は高い酒代のためより貧乏になる。そしていざこざが絶えない。

⇒239.バリエム盆地、924.ダニ族の戦争ダンス